

大量下血部位推定に有用であつた

$^{99m}\text{Tc-Sn}$ -コロイドシンチグラフィ

前田 敏男 多留 淳文 酒井 一芳
栃折 勝 寺井 淳子

要 旨

大量下血の出血部位診断を目的に $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイドによるシンチグラフィを施行した。出血部位は肛門部であることがわかり、治療方針の決定に役立った。出血が大量で持続している例には、できるだけ短時間に検査をすることが要求され、 $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイドシンチグラフィは有用であつた。

はじめに

映寿会病院には、昭和 58 年に回転式ガンマカメラである ZLC3700 (Siemens 社製) とコンピュータ Scintipac70A (島津製) が設置された。従来より存在した X 線 CT を始めとする X 線撮像装置、超音波診断装置、内視鏡、サーモグラフィと共に、RI 診断装置は成人病や老人病の精密検査に重要な役割を果している。特に総合画像診断という点では、血管性病変の検査には RI 検査が有益な情報を与えてくれることが多い。たとえば、極めて軽い一過性脳虚血発作の例では、来院時の X 線 CT が全く異常を示さなくても、脳 RI アンギオグラフィが頸動脈閉塞を示すこともある。このような例は数日後に再発作をおこし脳梗塞となる危険が大であり、当初より入院治療を決定するのに役立つ。いたずらに鎮痛剤の投与されている下肢痛の患者に、RI アンギオグラフィを行ない腸骨動脈の血流障害がみつき適切な治療で軽快する例も多い。このように画像診断が治療と直結する時に、医師として大きな喜びを感じるものである。今回は出血巣検索に RI 検査が有用であつた例を供覧する。

症 例

患者は 78 歳の女性である。以前より糖尿病と高血圧にて内服療養していた。昭和 60 年 4 月 18 日に後頭部皮質下出血を生じ手術をうけた。某医にて術後リハビリをうけていたが、6 月 10 日におむつに凝血塊が認められた。この時の診察では肛門部は異常なく、性器出血が疑われ当院に転院した。6 月 12 日に突然大量の下血が生じ、出血が持続するため隣の県立中央病院外科に転送することに決定した。このとき外科医より大まかでも良いから出血部位を推定するように言われた。転送の手配中に $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイド静注による腹部の RI アンギオグラフィと直後のシンチグラフィを撮像し、出血部位は肛門に近いことを診断した。外科では、結腸ファイバースコープで露出した痔動脈を確認し、結紮止血にて治療した。

画像診断のポイント

RI アンギオグラフィでは腸骨動脈の蛇行と右腸骨動脈の一部狭窄を示唆する描画不良を示しており、動脈硬化性変化が考えられる。おそい相で股間に淡い RI 分布が認められ、出血の持続を示唆している。直後のシンチグラムでは股間に明瞭な異常集積像を示している。部位は直腸肛門部と推定できる。

考 察

消化管出血には緊急処置を要する大量出血と、比較的時間的に余裕のある間歇的出血がある。前者で

$^{99m}\text{Tc-Sn}$ -colloid scintigraphy for the localization of massive anal hemorrhage.

Toshio Maeda, Atsumi Taru, Kazuyoshi Sakai, Masaru Tochiori, Atsuko Terai

Eijukai Hospital

映寿会病院 〒920 金沢市南新保町ル 53

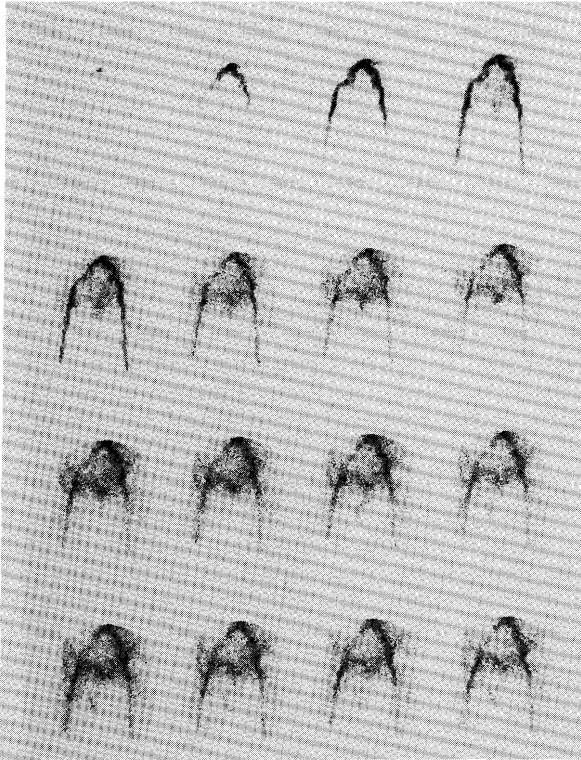


Fig. 1 Radionuclide angiography with $^{99m}\text{Tc-Sn}$ colloid shows arteriosclerotic changes of iliac arteries and extravasation of radionuclide at the anal region.



Fig. 2 Immediately obtained scintigram shows abnormal accumulation which indicates anal hemorrhage.

はすみやかに出血部位を同定し、適切な治療をする必要がある。十二指腸より上部の出血はファイバースコープが診断に有用であるが、下部消化管出血の部位診断は困難なことが多い。特に間歇的出血では

血管造影やファイバースコープでも部位診断は困難なことが多く、RI 検査が有用であるといわれている。RI 検査には $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイドを用いる場合と $^{99m}\text{Tc-RBC}$ を用いる場合があるが、今回報告したような持続出血で緊急を要する例には簡便な $^{99m}\text{Tc-Sn}$ コロイドシンチグラフィが有用である。特に本法は直腸以下の出血を疑う時は画像診断も容易である。一方間歇性出血を考える場合は一般に急を要さないことも多く、 $^{99m}\text{Tc-RBC}$ シンチグラフィによる 24 時間追跡が有用である。

文 献

- 1) Alavi A, Mclean GK : Radioisotopic detection of gastrointestinal bleeding : an integrated approach with other diagnostic and therapeutic modalities. In Freeman LM, Weissmann HS (eds) : Nuclear Medicine Annual. New York, Raven Press, p177—218, 1980.
- 2) Winzelberg GG, Froelich JW, McKusick KA, et al : Radionuclide localization of lower gastrointestinal hemorrhage. Radiology **139** : 465—469, 1981.
- 3) Bunker SR, Lull RJ, Tanasescu DE, et al : Scintigraphy of gastrointestinal hemorrhage : Superiority of ^{99m}Tc red blood cells over ^{99m}Tc sulfur colloid. AJR **143** : 543—548, 1984.